たちで、老いの兆しのみられる人たちばかりだが、「少しも変わらんねえ」「よく来たじゃん」と話しかけて来るなつかしい人たちである。

雨戸や障子からサッシ戸に変わったが、こちらの心が村から離れなければ交わす言葉もやさしいひびきで伝わって来ようというものである。

ＩＳＢの若者たちの存在は日本全国の農村では取り立てて記すべきものであろうとは思わないが、彼等のように意欲的に農業を考える若者が一人でも多いことは、日本の農業の将来のためにも心強いといわねばならない。彼等のこれから先を見守りたい。

失業

つくりだされる「怠け者」

松沢常夫

山谷・二つの風景

今日もまた、昼間から道路のすみに、旅館のかげに、公園に、そして歩道橋の上にまで、力なく酔いつぶれた、労働者とも浮浪者ともつかぬ姿がある。ある者はコホンコホンと、明らかにイヤなセキをして、春だというのにオーバーのエリをかきよせてちぢこまり、ある者は歩きながらゲーッと汚物をぶんまけ、またある者は丸めた新聞を手に③—③、③—②と競輪の予想をぶつぶつつぶやいている。立ち飲みの酒屋の中だけが、わずかな〝活気〟を感じさせる。

東京都台東区山谷——。

しかし、昔からある弁当屋の前だけは、ちょっとちがった印象

がある。最近めざましく進出してきたホカホカ弁当の各店にも人は入っているが、ここだけは、たえず四～五人の列が出来ているのだ。値段の方は他と変らないが、ごはんの盛りがいいのと、野菜の煮物が評判をよんでいる。それに、「ワリバシ5円」というのが、労働者の心をとらえているようだ。店主は言う。

「ワリバシ分だけでも安くしようと思ってね。五年くらい前までは、ほしい人は持ってけって出しといたら、弁当を買わない人がゴソッと持ってっちゃう。それで、こうしたんだよ」

見ていると、「ワリバシ」と声をかける人はほとんどいない。弁当にワリバシがつくのは当り前になっている今の社会で、5円という金を検約しようと発想する土壌がここにはある。並んでいる労働者の会話もちがう。「健康保険の印紙、はってくんなかったんだよ」「印紙代はとられてんだろ、ちくしょう」

前者の風景が余りに強烈なだけに、「あいつらは怠け者だからどうしようもない」という論理がハバをきかせ、真剣な対策がとられないままにきている。しかし、後者の風景もまた事実なのであり、前者に転落しないためにも、何が必要なのか、根本的に考えられねばならないと思うのだ。

アブレ手当さえもらえればいいのか

山谷の労働者のよりどころの一つである上野公共職業安定所玉姫労働出張所。ここには五、六五六人（三月現在）の日雇労働者が登録し、輪番で仕事の紹介をうけ、アブレ（失業）たときは失業給付をうける。

長くつづく不況で、あいかわらず仕事はない。四月五日は雨だったが、求人はたったの二〇人、失業給付をもらった人が二、四一〇人にものぼった。

大野茂男さん（仮名・65才）も、三月は五日間しか働けなかった。そのうち職安の紹介で行ったのは、東京都が発注する「特別求人」の二日間だけ。あとの三日間は友人をたよって働いた。

大野さんは失業対策事業で働いていたことがあるが、昭和四六年にやめた。失対打切り路線を進めていた労働省が「いまやめれば」という条件で出してきた四〇万円の「特例一時金」をもらって。

「若かったし、使ってやるっていってくれた所もあったからね」

しばらくはよかったが、そこがうまくいかなくなってからは、今のような拾い仕事をつづける生活となった。

「現場の片づけや、人がまにあわないとき、一日か二日たのまれて行くだけ。最近じゃあ、若い人でないと使ってくれないしね。高い所だってどこだってやる自信はあるけど、〃六五じゃあ〃って断わられるよ」

大野さんは足立区にある都営住宅に奥さんと二人ぐらし。奥さんは無職。子どもはいない。入居してから二十数年たった一戸建ての住宅は、床が落ち、壁板もくさっている。床下にトタンの古いのをしいたり、引っ越した人から畳をもらったりしたが、歩くとブカブカするのはなおらない。ただ、四畳半と六畳の二間で、家賃が七、九〇〇円と安いので助かる。ドヤ（旅館）なら、部屋でなくベッドを借りるだけで七〇〇円～九〇〇円はするから、それと比べれば楽な方かもしれない。しかし、それにしても月に五

日ていどの仕事ではくらしていけるわけがない。

「こないだ初めて年金をもらったけどね。三万ちょっとね。あとは、そうね、アブレ（失業給付）もらって生活してるようなもんですよ」

言葉になんとなく後ろめたそうなものがこもる。

前二カ月に二十八日働いた分の印紙が日雇労働被保険者手帳にはってあれば、一級（賃金日額五、四〇〇円以上）で四、一〇〇円の失業給付をもらえるわけだが、月に十四日も働ける労働者はまずいない。そこで不足分は一枚三百円で取引きされている〝ヤミ印紙〟を買って資格を得る。給付日数は十三日だが、日曜祭日と、働いた（ことにする）日はもらえないから、せいぜい十一日分、四五、〇〇〇円ていどが手に入る。

だが、こんな形で保険にたよらせていくやり方が、人間に何をもたらすのか。

「仕事がないときは一日、何をしているのか」ときくと、「外へ出たら金がかかるから出ない」ともらしたあと、「家でテレビでもみてるのかなあ」という答がしばらく考えこんでから返ってきた。

「自分たちもいけないんだけど、民間に長く行くってことになったとしても、アブレがもらえるからって、途中で休んじゃう。一日休むと二日休む。現場へ行きずらくなる。こんなことくりかえしてりゃ、信用もなくなるわけさ。こんなこと言って申しわけないけど、アブレ手当ってのは悪い制度だと思いますよ。これがなけりゃ、長く勤めようとするもんね。私も年だからね、土木の現場より、少し安くても、清掃の仕事なんかに行こうかなと思って履歴書を用意したこともあるんですよ。だけど、休んでて四千円もらえると思うと、そっちに流されちゃうんですよ。こんなことしてたら自分で自分の首をしめちまうことになるのはわかってんだけど……」

いつも〝怠け者〟という視線をうけているせいか、自分たちの側の問題点を強調した言い方をした。しかし、大野さんたちを採用するような会社は、長く使うようなことを言っても、仕事がなくなればすぐ首にしてくる。そういう、いつでもお払い箱にできる労働力としてしか、この社会では位置づけられていない。そのことを身をもって知っているからこそ、一番確実に収入になるアブレ手当を求めてしまうのではないのか。現に、かって私は、「頭の良い人に限る」と、人をバカにした求人条件を書いた札がかかっていたのを見たことがある。多くの業者は、そんな風にしか山谷の労働者を見ていない。

こうして、山谷の日雇労働者に支給される失業給付金は、一カ月に一億七、〇〇〇万円（二月）にものぼっている。

いま（四月）、国会で雇用保険法の改「正」案が審議されているが（日雇は今回の案には含まれていない）、いかにして安定した仕事を保障していくのか、ということこそが、当事者のためにも、財政上の見地からいっても、焦眉の課題とされなければならないことは明らかではないのか。

〝仕事〟がありさえすればいいのか

しかし、ただ〝仕事〟がありさえすればよい、というものでもない。

東京都が失業対策としてだしている「特別求人」は、アブレ手当よりもっと悪い面をもっている、というのが大野さんの見方だ。

「たとえば、築地の魚市場の清掃の仕事なんだけど、五十人が観光バスにのせられて、市場の裏通りからサッと箱番（待機所）に押しこめられるわけ。監督は『タバコがほしい者は買ってきてやる』って言って、私たちを絶対に外へ出さない。十一時に弁当と手袋がきて、市場が休憩になる十二時から三〇分くらい掃除するわけ。だけど、その時も市場の中には入れない。市場の人には見えないように、外の朝日新聞社の方とか、まわりの道路をやるわけ。その道具といったら、こわれかけのリヤカー二台、くさったスコップが数本にホーキが四〇本。それで、一時五〇分ころ弁当代四〇〇円を差し引いた六、五〇〇円の金をもらって、またバスに乗っけられて帰るわけ」

一日にたった三〇分の仕事、あとは箱番から一歩も外へ出ることは許されない。まるで刑務所だ。そんな扱いをされる所。なのに、玉姫出張所ではまっ先にここが定員に達してしまう。

「十二時に、〝さあ仕事だ〟って声がかかると、みんな競争でとびだしてく。働くためじゃないよ。ホーキを手にすりゃ何もしなくたっていいけど、スコップなんか持ったひにゃ、みんなが掃き集めたのをリヤカーにつみこまなきゃなんないからね。物置の入口は五〇センチくらいしかないから、どうしたって、若いのが先になる。年よりがふっとばされて、リヤカーの中にほっぽりこまれたこともあったよ」

玉姫出張所の窓口で、「N産業が請けている築地市場では三〇分しか仕事をしていないそうだが」とぶつけると、若い職員が「どこで聞きましたか」と、うさんくさそうに逆質問。「そこで働いた人から聞いた」と言うと、「うちでは八時半から四時半までの就労時間で紹介しています。そういう話があるなら、そうかもしれませんが、なかなかむずかしいんですよ」と正直に答えてくれた。あきらめているのか、苦悩しているのかわからないくらいにあっさりと。

逆立ちした政策

「末期症状だね、マンガだよ。労働政策のロの字も理念も何もない。あるのは治安対策だけ」

はきすてるように言うのは、同じ上野職安で、失業対策事業に紹介されている労働者を中心につくっている全日自労建設一般労働組合台東分会の安藤澄行委員長だ。

「アブレ手当が一職安で毎月一億円をこえてるんだよ、特別求人にしたって、築地のほかはガードレールの掃除、埋立地の草刈りなんかだろ、やってもやらなくても同じものばかりさ、人から感謝されるってことがありえない仕事なんだからね。私だって、マル民（民間登録日雇労働者）の仲間には、ずいぶん裏切られたことあるよ。だけど、仕事がない労働者がどんなみじめなものか、人間性がズタズタにされ、ボロボロにされちまうものかってことを忘れちゃいけないんだよ。だから、どうしようもない所まで落ちこむ前に、救済措置がとられなきゃならないんだ。たとえば、きのうから何も食べてない、どんな仕事でもいいから紹介してくれ、という労働者に、職安も福祉も何もできない。たまりかねて無銭飲食でもして騒ぎになったら、夜中だろうと朝早くだろうと、

サイレン鳴らしてパトカーが五台も六台もとんでくる。その費用ったら大変なものだよね、何十人という役人が動くんだから。まったく逆立ちしてるよ」

この人の言葉からは執念のようなものがほとばしりでてくる。

ではどうすればいいのか。逆立ちしない、道理のある政策とはどういうものか。

「そりゃ、安くてもずっとつづけられる仕事、人から喜ばれる仕事があればね」と大野さん。

安藤委員長も「そうすれば人間としてのハリが出てくる」と言い、その手始めにと、具体的な提起をしてくれた。

「私たちの現場は上野公園なんです。ここの掃除をするんだけど、労働省は失業対策事業の方も打切りたくて、来年には六五歳以上の仲間の首を切ろうとしているんです。そのためにこれまで月二二日働けてたのを、六五歳以上は二十日、七〇歳以上は一五日就労にけずってきたんです。それで、手が足りなくて大変なんですよ。三、八〇〇円くらいの賃金で、リヤカーを山盛りにして、一日四時間は目いっぱい働いてますけど、片っ方じゃ、何もしないで弁当つきの六、五〇〇円でしょ。その人たちをこっちへふりむけてくれるだけだって、アッというまにきれいにできちゃうんですよ。トラブルがおきるとか、信用されてないけど、そういうことを一つひとつ積み重ねていくしかないんじゃないの」

しかし、逆立ちしている労働省は、こういうまじめな提案に耳を傾けようともしない。それどころか、失業対策事業に働く労働者のうち、六五歳以上の四万人を首切り、大野さんのような苦しみ、悩みを背おわされる労働者を労働省自身の手で、さらに増大させようとさえたくらんでいる。

「怠け者」を生みだす構造にメスを

山谷の入口、国電・南千住駅におりると、目の前のパチンコ店の二階に、サラ金がデーンと店を構えていた。泪（なみだ）橋の方へ歩いていくと、ローンを兼ねた質屋がもう一軒。

「そうね、一番多いのは、福祉年金の手帳をもってきて、これで貸してくれっていう老人だね、すごいよこれは。七年ほど前からここに店をだしたんだけど、いなくなったり死んだりで取れなくてね、貸さないことにしたんだよ。とにかく旅館の人間は怠け者だし、何を持ってきたって貸さないよ。免許証もってきたって、再発行してもらえばいいんだしね。ほら、こうして旅館の一覧をもってて、ひっかかんないようにしてるんだよ」

サラ金にも相手にされない現実。

以前、野宿していた自称〝元ボクサー〟が「あんた、食ってみるか、これ何だかわかるか、これを食ってんだよ」と、魚の煮くずれたようなものが浮いている、ススだらけの石油カンをのぞいて、大粒の涙をこぼした情景は、今でも私のまぶたに焼きついている。

「怠け者」とレッテルを張って切り捨てるのはたやすい。だが、「怠け者」を生みだす構造にこそ、批判と改革の目を向け、人間としての最低生活を支える保障を築きあげていくようにしなければならないのではないか。